

わたしのお父さん

オノマ
リコ

登場人物

美月 娘・姉（10歳〜24歳）

陽司 息子・弟（17歳〜23歳）

嶺子 母親（24歳〜48歳）

洋 父親（0歳〜70歳）

※シーンは、#ごとに変わっていく。

#1 (現在)

美月、客席に向かって話し始める。

美月 名前は洋（ヒロシ）です。父の、父の名前です。太平洋の洋、一文字で、洋（ヒロシ）。洋は私の父です。私はつまり、娘です。

美月 0歳で海辺の町に生まれました。18歳で上京しました。22歳で就職し、34で起業しました。あ、父の話です。45歳で結婚。46歳と47歳で子どもを二人もうけました。65歳で退職。でもすぐに仕事で付き合いのあった人の会社に呼ばれて社長になりました。天下りみたいなものです。その会社は横浜の70階建てのビルの65階にありました。66階から70階は展望台です。

美月 70歳で父は死にました。肺がんでした。タバコは10年前にやめました。

美月 私は父の46歳のときの娘で、名前を美しい月と書いて、美月といいます。

陽司、舞台に現れる。美月に話しかける。

陽司 姉ちゃんの説明は要領を得ない

美月 （客席に）弟です。

陽司 どういうこと。チベットって。あのチベット？

美月 父が47歳のときの子供です。

陽司 死にそうなる人が行く場所じゃないだろ。チベットって。ブラッド・ピットが7年間いた、あのチベットだろ？

美月 名前は陽司。

陽司 どうして止めなかった

美月 太陽の陽に、司る。

陽司 癌だってわかってたんだろ？なんで――

美月 （陽司に）父さんが行きたがった

陽司 でも止めるだろ！

美月 行きたがった。死ぬ前に、チベットで出家したいって

陽司 出家？

美月 お坊さん。念仏を唱えながら死ぬ前は過ごして、死んだら鳥に食われたらいつて。ほら、向こうは鳥葬だから

陽司 鳥葬？

美月 鳥が、葬る――

陽司 それで、行かしたの

美月 うん

陽司 しないだろ、普通

美月 だって、父さんが

陽司 (苛立って) ああ。お前は普通じゃないもんな

美月 (客席に) 弟は私のことを「お前」と呼びます。

陽司 母さんは

美月 (陽司に) 納得してる

陽司 チベットで鳥に食われるのに？

美月 なによ。じゃあ自分で聞きなさいよ

陽司 わかってないんだ。きつと。母さんは

美月 自分で聞きなつて

陽司 父さんはなに、出家ってことは(手を合わせて) こういう――

美月 お坊さんになつたよ

陽司 なんだ、それ……

美月 知らなかったの？

陽司 なんだよ

美月 チベット、好きなんだよ、父さん。それでたぶんチベット仏教の信者

陽司 だったんだけど

陽司 信者？

美月 よく神田の教会？みたいなところ行ってたし。チベット仏教のね。あとで父さんの寝室見てきなよ。本棚、ドライブ・ラマだらけ。……チベットもちよくちよく行つてた。写真見せてもらわなかった？

陽司 旅行の写真は見たよ。秘境ばかり。ピラミッド、ジャングル、石造りの家とか、あと砂漠とか

美月 チベットは山だよ

陽司 そこで死にたいほど、気に入ってたとは聞いてない

美月 チベットは山と、空

陽司 あの人に宗教は似合わない！

美月 ……(客席に) 弟は、ときどき父のことを「あの人」と呼びます。

少しの沈黙。

陽司 骨は？

美月 (陽司に) 骨

陽司 いつもどつてくるの、日本に

美月 骨が？

陽司 遺骨だよ。まさか、骨もチベットなの

美月 (首を振って) あのね、骨を砕くんだって。鳥葬って。肉が食べられ
たあと、木槌みたいなので砕いて、それも鳥が食べるんだって

陽司 え？

美月 だから、なにも残らないんだって

陽司、八つ当たりのように壁を叩く。

陽司 お前はそれで平気なの

美月 ……父さんがしたって言ったから

陽司 母さんは

美月 なにも言わなかった

陽司 じゃなくて、どこにいるの

美月 庭

陽司、出て行こうとする。

美月 行くの。チベット

陽司 ……だれが

美月 私。行くの。見に行こうと思うの。近いうちに。あのね、鳥葬ツアー
っていうのがあるんだって。本当はいけないんだけどね、非公式で、
死体が鳥に食べられるところを見せるツアーがあるんだって、外国人向
けに。私、行こうと思う。思うんだけど。(迷いつつ) 陽司も、行く？

陽司、美月に近寄る。

陽司 父さんがチベットに行っちゃって、どうして教えなかった

美月 あんたは止めるような気がして

陽司 そう思ったら止めるよ。うちで一番常識があるのは俺なんだから

美月 それにあんたに連絡を取るのがイヤで

陽司 ……

美月 母さんも、勉強にさしつかえたりとか、そういうのを心配してたし。

陽司 陽司、父さんのことそんな好きじゃなかった、でしょう？知ってるし

陽司 だけど家族だ

美月 そうだけど

陽司 あの人は父さんだし、お前は姉ちゃんだし、母さんは母さんだ！

陽司、出て行く。

美月 弟は、だいたいいつも正しいんです。

#2 (美月、幼少期)

洋、56歳。

嶺子、美月に声をかける。

嶺子 またケンカをしたの？

美月 (子どもになつて) ちがう、ママ

嶺子 陽司ね、すごい音でドアを閉めた。ボタンッ！つて

美月 あいつが悪い

嶺子 弟のことを、「あいつ」なんて呼ぶんじゃない

美月 (面白くなさそうに) 陽司

嶺子 そう、陽司。(ゆっくり、強要しないで) なにをしたの？陽司は

美月 アメリカ人が

嶺子 アメリカ人が？

美月 アメリカ人がむかし、月に、お月様に行ったつて言った、陽司

嶺子 月つて、(上を指して) 月？

美月 月の地面に足跡があるつて。本を見せてきた。(顔ぎりぎりに近づけて

こうやって。こう。そのアメリカ人の、足跡の写真

嶺子 うん

美月 いや

嶺子 アメリカ人が嫌いななの？

美月 (首を振る) アメリカ嫌いじゃない。お父さんが住んでる。嫌いじゃ

ない。だけどね。いや。いやだ

嶺子 そのアメリカ人が嫌いななのね

美月

(嶺子にしがみついて) 陽司は馬鹿。大馬鹿。足跡なんか見えない。うさぎさんに見えるって、そういう模様はあるけど。嘘つきだ。あいつ、嘘つき

嶺子

陽司

美月

陽司。嘘つき

嶺子

美月は本当にお月様が好きね

陽司、舞台に現れる。

陽司

(客席に) 姉の思考回路は僕には理解できません。

嶺子

(美月に) わたし、少しね、わかるわ

陽司

父は、姉のことを(口ごもる)。

嶺子

ママが小さいときね、夏休みはお山で過ごしてたの。時々は冬も。白縫って名前のお山があつてね

陽司

自閉症じゃないかと疑っていました。

嶺子

ママはそこがすごく好きだった

陽司

そう打ち明けてくれたことがあります。ニューヨークの100階以上あるビルの56階を、父が一人で使っていたところに。

美月

どんなお山だったの？

嶺子

きれいな山よ。特に冬はね、雪で真っ白になるの。お日様の光が反射して、まぶしくて、目がくらんで、なにも見えない

陽司

僕はそのとき、そんなことを言い出す父に反感を持ちました。

嶺子

そこを、汚い観光客が登っていくのが嫌だったわ

陽司

でも、確かに姉はすこし変です。

嶺子

赤や青の服を着て、リュックサックを背負って、汚い頭で、汚く騒ぎながら白縫のお山に入っていくの。本当に嫌だった

陽司

(美月を見て) 頭がよさそうには見えませんでした。

嶺子

鏡を見ればいいのにね。そこが踏み入っていい場所か、そんなこともわからないのね。自分をちゃんと見たらわかるのに。そんなこともできないのね

陽司

父と母は、姉を私立の女子校に入れていました。

嶺子

みんな雪崩で死んでしまえて思った

陽司

姉は、その女子校の制服を着て、道で引っこ抜いた草とかを持って、だいたいいつも空を見上げて登校していました。

嶺子

美月ちゃんの気持ち、わかる

陽司

頭がよさそうには見えませんでした。

美月 お月さま、きれい
嶺子 満月ね。美月ちゃんが生まれた日みたい

美月と嶺子、月を仰ぐ。陽司、独白を続ける。

陽司 月の好きな姉でした。今でも好きです。月が。頭が、すこしおかしいくらいよくて、数学の模試で偏差値88とか、とったことがあります。どうしてこんなやつがって思います。数学だけじゃなくて、全教科いいです。国語も。普段は日本語おかしいのに。

美月 美月は、美しい月

嶺子 そう。お父さんがつけた名前

美月 陽司はよくわかんない

嶺子 それもお父さんがつけたの。美月ちゃんが月だから、次は太陽だって

陽司、しばし二人を見ている。

#3 (美月、中学生)

洋、61歳。

美月 お父さんは上海のビルの、61階にいます。上海には2年くらい住んでいます。再来年には日本に帰ってくるそうです。いまも、時々は帰ってきます。お父さんは私のことを美人だと言います。色白で、七難隠すと。

美月 (父に) 七難ってなあに

美月 (返答を受けて) そうじゃなくて。私の七難

嶺子 人の話が聞けないところ。

美月 言って。お父さん。私――

嶺子 可愛く笑わないところ。

美月 どこが悪い

嶺子 友だちがいなくて。よく回りが見えなくなるところ。頭がよすぎるところ。美人じゃないところ。誰彼かまわずすぐに宇宙の話をするところ。

美月 お鼻が、低いの？

陽司 父と母は、姉を偏差値48くらいの女子大に行かせました。

#4 (美月、高校生)

洋、64歳。

部屋には美月と陽司と嶺子がいる。嶺子、外出前。

嶺子 あの子にはその方がいいの
陽司 (嶺子に) でもさ、あの数学なら、東大とか東工大とかいけるんじゃないの

嶺子 東大や東工大でなにをするの？

陽司 いや……。天文学、とか？

嶺子 東大や東工大に天文学部があるの？

陽司 知らないけど。でも、宇宙工学はあるよ、東大

嶺子 美月が宇宙に行くの？

陽司 入ったからって、みんなが行けるわけじゃないけど

嶺子 ちゃんと生きていくことを教えた方がいいでしょ？あの子には

陽司 でもさ、もったいなくない？

嶺子 珍しいのね。陽司が美月のことで躍起になるなんて

陽司 そういうんじゃないよ。やめてよ

嶺子 お友だちと、ご飯食べてくるから。美月のぶんも、なにか作って食べてね

嶺子、身支度をしている。

陽司 姉ちゃんは、東大行きたいとかないの？
美月 ……近いところがいいな、私
嶺子 ケーキ、買ってくるかも。外国で賞を取った職人さんがいるんです
て

嶺子、出て行く。

陽司 じゃあさ、天文学は？

美月 それは興味ある

陽司 受験しなよ。あの女子大じゃできないよ

美月 でもあんたの指図は受けない

陽司 ……父さんと母さんの指図なら受けるって？

美月 私にはそれがいいんだって

間。

陽司 父さんの目にはさ、姉ちゃんは変な娘って映ってるよ

美月 変？

陽司 母さんの目には、お嬢さん失格って映ってる

美月 失格

陽司 ちゃんとした娘になってほしいんだよ。お嬢さんに。結婚相手、見つけてくれるよ

美月 結婚？

陽司 そう。大学卒業したらもう結婚。結納とかは在学中にすませる。昔の

お嬢様みたいだね。それで相手は金を持つてる年上の常識人

美月 陽司、どこにそんな文脈があった？

陽司 ああ？

美月 私、見つけられなかった。伏線は、どれ

陽司 俺は現代文の教科書じゃない！

陽司、美月をにらむ。

陽司 そんなんだから、父さんに見放されるんだ

美月 父さんは私を好きだよ

陽司 自分の娘だからだよ

美月 人類は月に行ってないって言ってた

陽司 お前は父さんにもそんなことを言ってるのか

美月 こないだ、父さんが大阪のビルの64階から降りてきたときにね、お話ししたの。いま流行っているものってなんだって聞くから、私のマイブームは、ずっと、月だつて

陽司 馬鹿

美月 人類は月に足を踏み入れちゃいけない。あんな愉快なドラえもんみたいなスーツを着て、踏みにじるなんて、冗談も、はなはだしい。アポロ11号なんて死んじゃえ。言ったの、私

陽司 父さんにはわからないよ。お前の言い方を借りて言えば、父さんにお前の文脈はわからない。俺にだつて、母さんにだつてわからないんだから

美月 ああ、私、結婚するの？

陽司 するよ。俺は読み取ったよ、文脈。文系だからな。お前よりもずっと文系だから。数学に対してまるでやる気が起きないって意味で文系。姉ちゃんは結婚する。かなり年上の、なんかいろいろできる人と結婚する。それで一生困らないで生活する。ただ結婚相手は信じているよ。

美月 行ってない！

陽司 行ってる！これからも、行く！

美月 あんたはどうして私から月を奪うの！

陽司 俺じゃない！人類だ！人間が、お前から月を取り上げる！

美月、声を上げて泣き出す。

陽司

(客席に) 姉のことはあまり好きではありません。同じクラスにいたら、不気味がついていたと思います。……でもそれでも、家族です。

陽司、泣いている美月を見ている。

陽司 ある理解がありました。

美月 アポロ“ふざけんな”11号

陽司

アポロ計画は1969年7月20日に人類を月へと送りました。その後アポロ12号、14号、15号、16号、17号が月へと行きました。13号だけは宇宙船の酸素タンクが爆発して、月面着陸はせず

に地球に戻ってきました。そこらへんは映画にもなってます。『アポロ13』。トム・ハンクスのやつです。アポロ17号以降、アメリカは宇宙開発に積極的ではありません。ロシアもです。すごい金がかかるんだそうです。だからアメリカは宇宙に行きたい他の国々にスペースシャトルを貸すレンタル業を始め、ロシアは金持ちの旅行先に宇宙を追加しました。

美月 アポロ“ゴミ虫”12号

陽司 だいたい宇宙なんて行かなくなってきた方がいいんです。

美月 アポロ“お前はいい子”13号

陽司 人工衛星だって飛ばなくてもいい。

美月 アポロ“くそつたれ”14号

陽司 衛星図がなくなっちゃって天気予報はできるし、軍事衛星やキラー衛星なんでもっての他だし、カーナビなんて地図を読めばいいじゃないですか。

美月 アポロ“受精卵からやり直せ”15号

陽司 本場に地球が危なくなったら、つまり、何十億年後かに地球は太陽に飲み込まれるんですが、その3億年前くらいから準備すれば十分な気がします。

美月 いいよね。陽司は

陽司 え？

美月 太陽には、人は行かない

陽司 ……熱いからね

美月 うん。燃えちゃうから

陽司 お前は人間が嫌いすぎるよ

美月 そんなことないよ！

陽司 じゃあそれはなんなんだよ

美月 アポロ“痛めに轢かれる”16号

陽司 ほら

美月 アポロ“天罰がくだれ”17号

陽司 それはもう、神さまだよ

#5 (現在)

美月、語りだす。

美月 チベット行きはすぐに決まりました。私の彼氏の、あ、詩人なんです、彼氏。その詩人の彼氏が、中国でチベットのガイドをしている台湾人の女の子を紹介してくれました。すごい才能あるんです、彼氏。チケツトも取ってくれて。本当に才能があるんです。

部屋には陽司と嶺子が現れる。

陽司 ……姉ちゃんが、チベット行くって

嶺子 陽司、ちゃんとお勉強してる？

陽司 してるよ。それよりチベットだよ、母さん。姉ちゃん一人で行けんの？

嶺子 ちゃんと働いてるのよ

陽司 知ってる

嶺子 実行してるの

陽司 やればきんだよ

嶺子 あの子が白金さんとお見合いの席で怪獣みたいに泣きだしたとき、

陽司 この世の終りかと思った。お父さんと二人で涙が出た

母さんたちが心配するよりは普通だったんだよ。銀行は似合わないけど

嶺子 あの子聞くのよ？「人類は月に行ってると思いますか？」。どうしてそ

れを初対面の人に、それもお見合い相手に言おうと思うのかしらね

陽司 その話、800回目くらい

嶺子 それからわたしとお父さんに向かって「私はお嬢さんじゃない」って
うん

嶺子 「お嬢さんじゃない。陽司と、一緒。私は、男の子だ！」

美月 (同時に) 男の子だ！

陽司 ……

嶺子 お父さんは情けないって言った。わたしも情けなかった。「ごめんなき

い」って言ったの。子育てはわたしの仕事って思ってたでしょ？ お

父さん。(陽司を見て)「ちがうの？」みたいな顔しないでよ

陽司 いや、だって

嶺子 子育てはわたしの仕事、かもしれないけど、でも仕事じゃないわ、ワ

ークじゃ。生活だからできたの。でもやっぱり父親も協力してくれな

くつちや、うちはもう全部、わたしだつたでしょう？それは変よ。ああいうお父さんだから仕方ないけど。ねえ？父の日に何ももらえなくて、寂しがつてたけど、母の日に何かもらえてもわたしのほうが寂しかったわよ

陽司 父さん、寂しがつてたの？

嶺子 口に出しては言わないわよ。古い人だもの

美月 チベットに行く日は晴れでした。安いからって彼氏が取った中国のマインナーな方の航空会社の飛行機はときどきゆれました。でも彼氏には才能があります。私はゆれる機体の中で、本を読みました。鳥葬は人をうつ伏せにして行われるんだそうです。

美月は陽司の身体を使って客席に向けて鳥葬を実演する。

嶺子 家に、帰ってくることはできないの

美月 そもそも鳥葬っていうのは直訳じゃないんです。チベット語はちよつと読めないんですが、中国語だと「天葬」。英語だと「SKY BURIAL」。直訳すると青空葬。鳥じゃなくて、空なんです。

嶺子 卒業してからでいいの。陽司

陽司 姉ちゃんがいるよ

美月 死体の服をはぎます。うつ伏せにして、手足を縛ります。

嶺子 これ以上美月と二人きりだなんて耐えられない

美月 うつ伏せにするのは、内臓を見なくてすむからです。

陽司 ケンカばかりしてるの

嶺子 わたしが怒ってるだけ。一方的に怒るだけよ。あの子、わたしに逆らえないんだもの。誰にだって逆らうのは下手な子だけ。よくないわよ

美月 次に死体の肉を切り分けます。

美月、首、手、足、の順に切り分けていく。

嶺子 結婚、できるのかしらね、あの子

陽司 母さんは小さい頃、俺より姉ちゃんを可愛がってたよ

嶺子 そんなことないわよ

陽司 そうだったよ。それで姉ちゃんは母さんべったり。なにかついでというところ引っ付いてた

美月 血があふれないように、粉を撒きます。

嶺子 ……そんなことないわよ

陽司 中学生くらいかな。逆転したよね。姉ちゃんはずがられて、俺の方が可愛がられるようになった

美月 粉はツアンパというらしいです。麦焦がしです。これで血を吸い取らせませす。

陽司 「ざまあみろ」って思ったけど、その時は。でも親なら平等に子どもを愛せよって気持ちもあつてさ

美月 骨から肉を切り離します。

陽司 わかってるよ。親だつて人間だし。特に母さんは人間っぽいいし。公平になんておかしいよね

嶺子 それで、出て行ったの？

陽司 ちがうよ。…いらいらすんだよ、姉ちゃん。母さんと一緒。あと父さんも嫌だった。めったに会わなかったのに、父親づらしてさ

嶺子 ……

美月 もう鳥が集まりだしています。

嶺子 死んだ人のことをそんな風に言うもんじゃないわよ

美月 空から鳥が降ってきます。

陽司 なんだつたんだらうね、あの人は。仕事はできたんだらうけど、どん

嶺子 た どん高いビルに移っていったけど、地面に降りたらただの人以下だった
嶺子 言いすぎよ

美月 食べられます。

陽司 おじいちゃんのかせにIT化とかもしっかりついて行って、すごいのにさ。俺が高校生のとき、父さんがドバイの超高層ビルの66階に移る前、酔っ払って帰ってきて叫んだんだよ。「この家のやつらは誰も俺についてこない！」

美月 ハゲワシ、ハゲワシ、ハゲタカ、ハゲワシ……

嶺子 陽司

陽司 俺たちのこと散々ほっぽってそれはないだろう

嶺子 昔の人なのよ

陽司 母さんと姉ちゃんは寝てたよ。俺だけ起きてたんだ。受験勉強で。俺は父さんに 水をぶっ掛けた

美月 ハゲワシ

陽司 「このクソジジイ」つきで
嶺子 クソジジイ？

陽司 俺、絶対公務員になる。毎日5時に帰って家族サービスしてやる。思ってたんだ、あん時

美月 肉はすっかり平らげられて、後には骨が残ります。

陽司 父さんはただの真っ赤な顔したおっちゃんだった。……死ぬなんて思わなかった

美月 骨を石で碎きます。

陽司 介護、大変だった？

嶺子 (首を振る) 癌だって告知はしなかったのね。ガタガタってきそうだしよ、お父さん。だけどインターネットなのね、いまって。自分で

調べちゃって

美月 頭蓋骨からは脳みそが出ます。

嶺子 病院引き払ってね。あつという間。チベットへ行ったの

陽司 なんで最後に宗教かな

嶺子 ちゃんとしたところよ

陽司 宗教にちゃんともなにもないよ

嶺子 じゃあ陽司、自分が死んだときどうするの

陽司 念仏とかはいらない。ご焼香もいらない。簡単に式やって、骨は散骨

嶺子 わたしはちゃんとしてもらうからね

陽司 母さんはまだ死なないだろ

嶺子 陽司よりは早く死ぬでしょう

陽司 それは、まあ……

嶺子 「今までありがとうございます」って言われた

美月 またツアンパ、麦焦がしの粉をまきます。砕いた骨、骨髓、脳みそ、

骨にこびりついていた肉、そういうものをツアンパでまとめて、お団子にします。

嶺子 お父さんによ

美月 それを鳥が食います。

嶺子 考えてみるとね、お父さんと一緒に何かしたのって、美月のお見合いが最初で最後なの

美月 後に残るのは髪の毛だけ

嶺子 二人でタッグを組んで、美月をお嫁にやろうとした。「月はそのうち人間の住処になります」白金さんがそう言って、美月を泣かせてダメにしちゃったけど……

美月、嘆息。一仕事終えたかのように本を閉じる。

嶺子 あれが最初で最後

美月、眠りにつく。

陽司 母さんはさ、父さんのこと好きだった？

嶺子 ……

陽司 俺さ、(怖か)ったんだよ。…父さんと母さん見合いだし、年はなれてるし、自由恋愛じゃないっていうのはわかってたから。小さい頃から。俺、怖かったんだよ。父さんのことなんて別にいいんだけど、でも、怖かった

嶺子 そう

陽司 俺、変だよ。父さん死んだからかな

嶺子 無理してたのよ

陽司 姉ちゃんはどうかんだろう。父さんのこと好きだったかな

嶺子 陽司

母さんはマイペースだしさ、姉ちゃんはまともな話できないし、父さんは、俺姉ちゃんみたいに頭よくないからさ、だから受験失敗したし、そもそも勉強なんてする気になんねえし、でも弱虫って思ってる父さん、きつと——

嶺子 陽司!

陽司 俺、絶対いまどうかしてる

嶺子 やつぱり帰ってこなくていいわ、陽司。あんた優しいから、うちにいたら全員分のお茶わん洗うことになるから、きつと。わたしや美月みたいになんてふてぶてしくなるまで帰ってこなくていいから

陽司 向いてないんだ、家族って

嶺子 向いてるとか向いてないじゃないでしょう

陽司 じゃあ俺なんなの？

嶺子 陽司。わたしは産んだし、育てたし、それにそう、愛してるわ。あのね、そんな顔してるけどだって息子よ？そりやあ愛してるわよ

陽司 絡みづらい

嶺子 お母さんとお父さんの間に自由恋愛はなかったけど、お母さんとお父さんは二人で美月をお嫁入りさせようって頑張ったわ。陽司がきちんと勉強して、立派な公務員になることを応援してるわ。お父さんがチベットで死にたいって言ったとき、「わかりました」って、言ったわ。ちゃんと家族よ。ちゃんと助け合って——

陽司 どうして父さんを止めなかったの

嶺子 (初めて気がついたように) 別に、構わなかった

陽司、部屋から出て行く。

嶺子 陽司

#5. 5 (美月、23歳)

洋が発った日。

美月、眠ったまま嶺子に語りかける。

美月 母さん

嶺子 はやくお風呂入りなさい

美月 父さん、ドライ・ラマが好きだったの？

嶺子 よく神田の教会？みたいなのとこ行ってたでしょう

美月 母さん

嶺子 好きなのよ、チベット。写真見たでしょう？私たちよりずっと大切なの。安らぐのよ。お風呂入りなさい。深夜うるさいわ、換気扇

美月 わたし、さみしいみたい

嶺子 ……お風呂

美月 父さん、いい人だったよね

嶺子 もう死んだみたいに言わないでよ

美月 ごめんなさい

嶺子 お風呂入りなさい。いいから。明日も仕事でしょう。いいから。お父さんはもう、死んだようなものなんだから

#6 (現在)

美月、目を覚ます。

美月 チベットの、山の夢を見ました。

嶺子と美月。美月が中学生のある日。

嶺子 美月

なに。ママ

嶺子

美月とママとはちがうのね

美月

(身体を比べて) ちがうよお

嶺子

わたしね、あなたが生まれたときうれしかった。女の子で、どんどん育っていくとますます女の子になっていって、うれしかった。この子はわたしの気持ちが変わる子だっどどこかで思っっちゃった。もしかしたら、最初から思ってたの。でも、ちがうね

美月

ママ

嶺子

制服は、ちゃんと襟をきれいにして。ぼんやりと歩かないで。椅子に座ったら足を閉じて

美月

忘れちゃうんだもの

嶺子

美月は全然わたしの気持ちが変わってない。わたしにも美月の気持ちはわからない

美月

だって、別人じゃない

嶺子

美月はちよつと頭がよすぎるのね

美月

それ言わないでえ

嶺子

他の人よりはね、理解できるつもりよ。でもそうじゃなかったの、思ってたのはちがうの

美月

ママ

嶺子

ちゃんときれいにして、可愛くして、先生に呼ばれたらきはききとお返事するのよ

美月

ママ

嶺子

なんなの

美月

母という字と、月という字は、似てるね

嶺子、泣き出しそうになって美月を見ている。

美月、現在の年になって嶺子に語りかける。

美月

母さん、鳥葬はね、結構いいんだって。チベットで。ほんとが一番いいのは火葬で、でもそれは偉いお坊さんしかできないんだって。お父さん、えらくなかったのね。それで次は鳥葬なんだって。鳥に食べられるのが、次。その次は水葬。水に流す。魚に食べられるの。魂は水の中よ。最後が土葬で、土に埋めるの。魂は土の中。あのね、火葬や鳥葬は煙や鳥になるでしょう。魂は空高く舞い上がるのよ

陽司

そう思うと嫌だ。飽くなき上昇志向、出世願望

美月

父さんだからね。思うよね

陽司

いくつものビルを渡り歩いて、そのたびに事務所を高くして

嶺子

あの人は海辺の町に生まれました。

陽司

高いところにいすぎて、地上二階建ての家の中には入れなかった

嶺子

あの人の生まれ育った土地へ行ったことがあります。一度だけ。海の匂いがしました。真っ赤な顔で、声の大きな人たちがたくさんいました。怖いと思いました。おうちには鍵がかけていまして。お手洗いは暗くて、いわゆるポットン便所でした。一番風呂をすすめられました。そこにはナメクジがゆだっていました。あの人が、お兄さんと大声で話している声が聞こえてきました。すべて方言で、わかりませんでした。怖かった。あの人と散歩に出ました。怖かった。夜が真っ暗で、星が無数にあって、わたしはすごく怖かったです。

美月

仏教って輪廻転生なんだって。知ってるか。生まれ変わるんだって。生まれ変わってね、人間になるのはダメなんだって。神様が、仏様だね、いるところに生まれ変わりたいんだって。そこでは寂しいも辛いも悲しいも苦しいもなくて、楽しいも気持ちいいもなくて、だるいもうざいもしんどいもなくて、みんなお経とか唱えて、穏やかに幸せなんだって

嶺子 星なんて、幼いころには何も怖くなかったのに。

美月 みんなそこに行きたいの。だからチベットのえらいお坊さんはね、本当は仏様のそばにいけるのに、みんなをそこへ行かせてあげたいから何度も何度も人間に生まれ変わって、そのお手伝いをしてるんだって。優しいね

陽司 父さんは寂しい人だね

嶺子 洋さんはとてもうれしそうでした。畑や、船や、通っていた小学校を教えてくださいました。この人はとても他人なんだと思いました。結婚なんて、とんでもないことをしたのかもしれないと。子どもだったんです。

美月 でもそうやってさ、チベットのお坊さんがどんどん人間を仏様のもとに送ったらさ、いつか地球から人間はいなくなるよね

嶺子 とにかくえらい人だと思っていました。お仕事を成功させている、洋さんは、えらい人だと

美月 そう考えるとちよつと怖くなる

嶺子 あの人は海辺の町に生まれました。

陽司 仏教の教えに拠らなくなつて、人類はいつか滅びる

嶺子 18歳で上京しました。

美月 地球はやがて太陽に飲み込まれる

嶺子 22歳で就職し、

陽司 人間は宇宙に逃げる

嶺子 34歳で起業しました。

陽司 ロケットや宇宙ステーション

嶺子 45歳で結婚。

陽司 あるいは他の星星

嶺子 46歳と47歳で子どもを二人もうけました。

美月 でも、その星星にも終りが来る

嶺子 65歳で退職。

美月 星は爆発して、宇宙はブラックホールだらけになる

嶺子 すぐに仕事で付き合いのあった人の会社と呼ばれて社長になりました。

美月 ブラックホールもやがて爆発して、宇宙はただの闇になる

嶺子 その会社は横浜の70階建てのビルの65階にありました。

陽司 そうだっけ

美月 知らなかった？

嶺子 66階から70階は展望台です。

美月 人間はいつか死んで、星星もいつか死んで、宇宙は潰れたり、爆発し

たり、何もなくなつたまま広がったりつづけたり、いろんな説があるけど、

とにかく残念な感じになるんだよ

陽司 お前でも残念なんだ

美月 残念だよ。だって私、地球人だし宇宙人よ？

陽司 はいはい

美月 何のために発生したんだろう生命、って思うと怖いし、足元ふらふらになる……

陽司 生きてることがむなしくなる

美月 そうじゃない？人間ががんばっても、なにも残せないんだから

陽司 ……俺にはよくわかんないよ

美月 そう？

陽司 俺にはいま、生きてることしかわかんねえ。人類なんて、ソーダイすぎてさ

美月 あんた、ポジティブだね

陽司 そうかあ？

美月 お日さまの名前をもらった子はちがうね。ポジティブ。陽司は、ポジティブ

陽司 お前、絶対バカにしてるだろ

美月 (びっくり) 褒めてるのに！

陽司 まああれだよ。むなしいか言っていないで、一生懸命、いまを生きなさい

美月 ……むなしいってさ、「空」って書くよね

陽司 キョっていう字だろ。「嘘」の、こっちがわ——

美月 空とも書くよ。「空」に送り仮名「しい」で「空しい」

陽司 ……そう

美月 そうだよ
陽司 空か
美月 空だよ

二人、しばらく空をみている。

#8 (美月、20歳)

洋、68歳。

お見合いの日。

嶺子 美月

美月 ごめんなさい

嶺子 あなた、男の子じゃないでしょう

美月 (首を振る)

嶺子 女の子でしょう。なに言ってるのよ

美月 男の子なの。そう思って

嶺子 そんなに白金さんが嫌なの

美月 男の子だから、仕事をする。仕事をするの。あと、お友だちとか、恋

人とか、男の子だから、ちゃんと作るから

嶺子 意味がわからないわよ。美月、お母さんの方を見なさい

美月 お母さんのことは好きだから。男の子だから。ちよつと離れて好きで

いるから

嶺子 はあ？

美月 男の子として、見てください

嶺子 ……お父さん

美月 ……

嶺子 お父さん。どうしましょう。この子ったら。あんなこといって。(白金

さんに) ちがいますの。弟がおりますでしょう。うらやましいんです

わ。器用な子だから、弟は。(せかすように) お父さん

嶺子 あなた？

おそらく、洋は泣いている。

嶺子 ええ？

嶺子、洋を介抱しながら。

嶺子 白金さんの前ですよ。あなた。……あなた（涙ぐむ）

嶺子、その場に佇んでいる。

美月も驚いて父を見ている。

美月 お父さん

#9

嶺子

あの時、あの人は四十五階のビルの展望室のあるフロアにいました。何度目かのお見合いです。いままでの人よりうんと年上でした。いままでの人よりお金持ちでした。家柄を気にしなくていいのは楽そうでした。わたしはもう、山には行かず、街中に出て、赤や青の服を着てさわいでいました。あの人はわたしとわたしの両親に言いました。「天女様だと思つて大事にします」と。

嶺子 70歳であの人は死にました。肺がんでした。タバコは10年前にやめていました。

美月 月も、地球と一緒に消える、きっと。人間に見捨てられた地球と一緒に。太陽に飲まれる

嶺子 あの人と結婚したとき、わたしは24歳でした。

美月 太陽はその前に水星を飲んで

嶺子 田舎の人でした。でも、えらい人だと思つていました

美月 金星も

嶺子 とてもえらい、神様みたいに。

美月 そして地球を飲む

嶺子 子供だったんです。

美月 月もきつとほぼ同時に

嶺子 毎日連絡を待っていました。

美月 飲まれる

嶺子 美月が大きくなるころによくわかりました。あの人はえらくない。でももしも地球のほうが一瞬早く飲み込まれたら

嶺子 どんなに会社でえらくても、年上でも、お中元やお歳暮が山のようにきても、えらいはずないわ。いつも家にいなくて、子どもたちのことなんて何一つ知らない

美月 一瞬、月はただの星になる

陽司 地球の引力から解放たれて

美月 地球も月の引力から離れる。そもそも別の星なんだから

陽司 偶然引かれあつて

美月 一緒にいただけなんだから

嶺子 わたしとあの人のこれからは、祈ることしかありません。

#10 (現在)

美月、「地球の歩き方、チベット編」を読んでいる。

美月 チベットは山岳地帯です。チヨモランマ、かなり近いです。写真で見
る限り、白い切立ったお山がたくさんあります。きつと空気は薄い
です。……チヨモランマ。

美月、微笑む。

美月 白い、美しい山に見守れて父さんはしんだのかなあ。そう思うと、ち
よつといいです。雪山って好きなんです。お月様の次に。

#11 (現在。美月、24歳)

美月、公衆電話をかけている。

美月 母さんは、父さんのこと嫌いじゃなかったと思う

陽司 そうかな

美月 だって別れなかったじゃん

陽司 結果がすべてか

美月 途中経過も大事だよ。ずっと、別れなかったんだよ。他の家は知らないよ。でもさ、父さんと母さんは、そうじゃないかなって思うんだ

陽司 ……どう？チベット

美月 意外とビルディング

陽司 へえ

美月 これからまたバスで山岳部だから。とにかく山が楽しみ。山

陽司 姉ちゃん、全然たくましいよね

美月 その日本語変よ

陽司 父さんのこと、好きだったの

美月 なんだ

陽司 俺、鳥葬なんて見たくねーもん

美月 私、グロ平気だし

陽司 そこかよ

美月 「一緒に来ないかって」って
陽司 ん？

美月 最後に。家を出るとき。私に。チベットに知り合いいっぱいいるはず
だけど、人類は月に行ってないってまた言ってくれたけど、でも私、
仕事とか恋人とかいろいろいるあるから

陽司 それでよかったと思うよ

美月 父さんも「そうか。それでいい。」って。勝手に納得してた

陽司 ……とにかくさ、俺の分も祈っというよ。別の死体だけど、でも食べる方は、鳥は同じだろ、たぶん。その死体さんも、父さんと同じ胃の中におさまるわけだから

美月 まかせて

陽司 じゃあまた日本で

美月 あ。何羽ぐらいかな

陽司 え？

美月 父さんを食べた鳥、何羽ぐらいなんだろう

陽司 知らないよ、たくさんじゃない
美月 そっか

陽司 きつと空中に広がってるよ。父さん

美月 たくさんのハゲワシの栄養になってる、父さん

陽司 ハゲワシ？

美月 父さんはもう父さんじゃないね

陽司 うん

美月 洋でもないね

陽司 うん

美月 溶けて消えたアミノ酸だね

陽司 ……脂肪とかカルシウムもあると思うけどね

美月 でも、早く生まれ変われそう

陽司 ……そうかもな

美月 陽司、電話だと優しいね

陽司 お前が変なこと言わないからだよ

美月 そうかなー

陽司 帰り、空港で電話しろよ

美月 うん

陽司 じゃあまた

美月 うん。母さんによろしく

美月、電話を切る。空を見て微笑む。

美月 父さんは、うまくいけばいまは仏様の近くに生まれ変わって、お経を唱えています。

了

【参考】

オペラ「ジャンニ・スキッキ」より “O mio babbino caro” (わたしのおとづさへ)

「鳥葬の国―秘境ヒマラヤ探検記」川喜田二郎著 講談社学芸文庫
「ああでもなくこうでもなく」橋本治著 マドラ出版